HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	CESPA, Marianna
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11630号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58741
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Cespa_Marianna_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　チェスパ　マリアンナ

学位論文題名
イタリア語と日本語の過去時制に関する対照研究

まず、イタリア語の近過去形と遠過去形が扱われ、これらの時制の本質や機能について考察を進めることによって、両形式間の相関関係が提示される。近過去形と遠過去形の置き換えが可能であるという従来の説明を批判し、前者は後者よりも広い範囲で用いられると説明する。「終結」を表す現在と切り離された近過去（アオリスト的視点）と、「実現した完了」を表す現在と切り離されていない近過去（完了的視点）という近過去形の二重性が提唱され、前者は遠過去形、後者は現在形とそれぞれ深く関係づけられると主張する。この二つの機能は、共起する副詞的要素、従属節における時制の一致現象を観察することによって明示的に区別されることが示される。

続いて現在形が扱われるが、過去時制との関連を考察するために、特に過去に起こった事態を表す「歴史的現在形」を中心に考察が進められる。従来提唱されていた、過去における出来事の語りをより生き生きとしたものにする「現前化」に加え、過去における出来事を語りとして伝える「物語化」というメカニズムを提案し、これによって過去の出来事を過去形ではなく、現在形で述べるという話し手の選択が可能となると説明する。また、近過去形と現在形の交替が可能となる中立化について、完了的近過去形のみが可能で、アオリスト的近過去形では不可能であることが示される。さらに、動詞の語彙的性質に関する制限が課せられると述べ、変化動詞、瞬間動詞、持続動詞において中立化が可能であると主張する。

次に、日本語の「タ形」が扱われ、「テイル形」との相関関係も考慮に入れながら過去を表す機能について論じられている。イタリア語の近過去形と同様に、「タ形」も単なる過去の出来事を表す機能と、出来事が現在実現済みであることを示す機能の二つをもつという二重性が主張される。両機能の区別は必ずしも容易ではないが、副詞との共起関係を考察することによって明らかにできることが示される。また、基本的に発話時以前に起こった出来事を表す「タ形」が、名詞修飾節と条件節においては発話時以後の完了を表すことができるという事実について、事態を時間軸に位置づけるという基本的な機能とは別の機能を「タ形」がもつためであると説明する。すなわち、名詞修飾節においては形容詞に準ずる機能を果たし、条件節においてはその本質から時間軸に事態を位置づけず、その事態の成立を仮定する機能をもつのである。

続いて「テイル形」については、主に過去を表す機能について考察が進められる。過去を表す「テイル形」の機能は従来の研究ではパーフェクトとして捉えられていたが、本論文ではさらに、出来事が完結している点に焦点が当てられる「完了」と、出来事が完結した結果に焦点が当てられる「効力持続」に区分すべきであると主張する。前者は客観的な概念であるのに対して、後者は話者の判断による主観的な概念であると位置づけられる。「テイル形」は形式的には過去時制ではないことから、過去を表す機能には制約が課せられる。すなわち、出来事を話者が現在の視点から「経験」として語る場合に限られると説明される。更に、非過去形が過去の出来事を表す「歴史的現在形」について、従来の「劇的現在形」と「語り的現在形」という区別では不十分で、「伝記的用法」と「会話的用法」という新たな区別を設定すべきであると主張する。その上で、イタリア語と異なり、日本語では会話的用法において「テイル形」を含む歴史的現在形の使用が不可能であると説明する。

ここで、過去時制の機能を考察するには共起する副詞の性質を考慮に入れるのが不可欠であるという観点から、日本語の「もう・すでに」と伊語の「già・ormai」が分析される。「もう」は状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという完了の意味を持つが、それに加えて状態の変化が想定よりも早いことを表す「予期」の解釈と「経験」の解釈が得られるとする。これらの解釈には、動詞の意味を話者の前提に従って再解釈するという主観的な判断が作用するメカニズムが

あると主張する。これに対して、「すでに」は完了と経験という二つの意味しか持たないという点で「もう」とは異なると説明する。伊語の副詞については、「già」は完成相を表す時制と未完成相を表す時制のいずれとも共起可能であるが、完成相を表す単純時制と共起する場合には「経験」の解釈のみが可能であることが示される。これに対し、「ormai」は完成相を表す単純時制との共起が不可能であることから、「経験」の解釈が不可能であると説明する。さらに、「あきらめ」という主観的なニュアンスを伝える用法がある、語順によって述語から切り離すことができる、複合時制において位置により即時性のニュアンスが強くなる、という三点が「già」には見られない「ormai」固有の特徴であることが示される。このように、過去時制と共起して類似する解釈をもつ四つの副詞が、機能的に重なる部分を示しつつも、それぞれ固有の機能・使用上の制約がみとめられると主張する。

次に、伊語の大過去形が扱われ、この時制の他の過去時制との関係が完了性という観点から論じられている。大過去形はその形式から、完成相の時制と未完成相の時制のいずれとも共通点を持つが、一方で、これらの時制とは異なり、「設定時点」と「時間的投錨」という二つの概念を同時に必要とする時制である。大過去形の本質は、近過去形の持つ「実現した完了」及び「未実現の完了」とは異なる「過去完了」という性質によって特徴づけられると主張する。この仮定をもとに、間接話法の従属節における時制の一致のルールに従わない事例が簡潔に説明できることが示される。

続いて半過去形が扱われるが、本論文の中心的なテーマである完了性に関係する部分に限って他の時制との相違点を明らかにしている。半過去形の本質的特徴として、時間的投錨を必要とすること、描写する事態の過程が不定であることの二点をあげている。この仮定に基づき、特に複文におけるこの時制の特異性が論じられる。すなわち、関係節においては基準時点が主節の動詞の時制である場合と発話時点となる場合がある。この違いは用いられる動詞の意味的性質によって決定されるが、半過去形の本質である時間的投錨のメカニズムが異なるために生じると説明される。

最後に、「タ形」及び伊語の大過去形・半過去形との対比を行いながら、日本語の「テイタ形」の分析が進められる。「テイタ形」の機能として従来「継続」とひとくくりにされていた用法を、「進行」と「同時」に分け、さらに後者は、過去のある区間における時点との同時性と、過去において並行していた二つの動作・状態を表す同時性に下位区分すべきであると主張する。また、もう一つの機能である「以前完成」では、設定時点の存在が必要となるとする。この形式は、それが出現する補足節の種類によって用法が異なり、引用節においては完了と同時のいずれの解釈も可能であるのに対して、名詞節では同時性の解釈が優勢となると説明する。名詞修飾節においては、動詞の種類によって「テイタ形」の解釈が変わってくることが論じられる。結果動詞の場合には、従属節と主節が関連し同時性の解釈が生じるのに対して、持続動詞の場合には従属節と主節が関連せず同時性の解釈が出にくいと説明する。